

しぶ さわ もと し  
**渋沢元治**



渋沢元治 (1876 ~ 1975)

出典：『名古屋大学五十年史 通史 1』

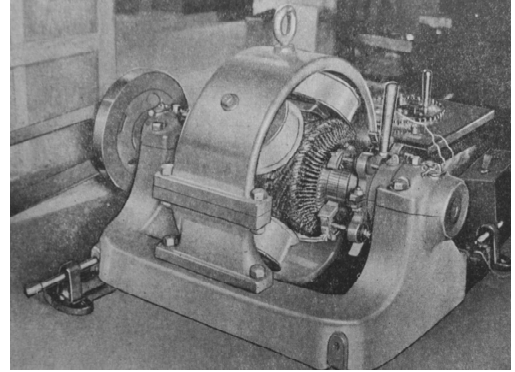
**捕雷役電；雷を捕らえ電気に役立てる**

—名古屋帝国大学初代総長は電気技術者でもあった—

■生い立ちと官・学の立場からわが国の電気事業発達の基盤を作るまで

渋沢元治は1876(明治9)年、埼玉県大里郡八基村大字血洗島(現在の埼玉県深谷市)の豪農渋沢家の長男として生まれた。「資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一とは伯父と甥の関係にあたる。

第一高等学校から東京帝国大学に進み、電気工学を学ぶ。大学3年の時の小田原馬車鉄道会社の電化工事現場での実習にて、海外文献を頼りに、回転変流機の据付・運転を体験する。このとき



渋沢元治が設計した回転変流機

出典：渋沢元治『五十年間の回顧』

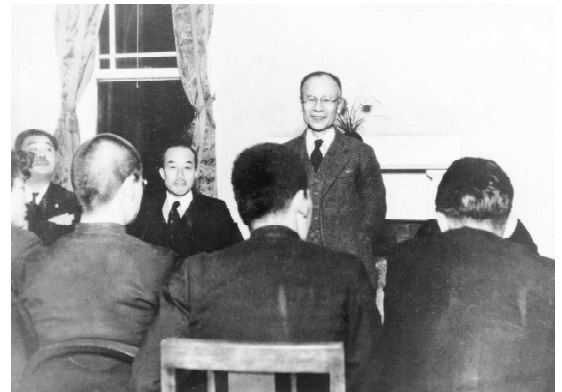
極性変移の理論を考え出すなど電気についての強い探求心を持った青年であった。続いての石川島造船所での実習では回転変流機の設計を小田原馬車鉄道会社での知見

をもとに行い、完成した国産第一号回転変流機は東京高等工業学校で学生実験用として関東大震災で焼けるまで活躍した。

東京帝国大学(東京帝大)を1900年に卒業、1年間の兵役後、伯父栄一のすすめで欧米に留学し、その中でドイツのシーメンス社やアメリカのGE社の工場実習を行った。帰国後、1906年逓信省に入ってから、持ち帰った世界最高の技術を基に、官僚として日本の電気行政の確立に大きな足跡を残す。官僚を行いながらも自らの研究の研鑽を重ね、論文テーマ「同期電機の特性」にて工学博士の学位をとり、東京帝大教授、電気学会会長(1924年度)となる。自宅の書斎には座右銘として、「捕雷役電」なる扁額を掲げていた。これには、「さまざまな電気現象を把握し、広く社会の役に立てる」という意味もあろう。東京帝大工学部長を3年間務めた後、東京帝大教授兼通信技師を1937(昭和12)年に定年退官し、電気事業界を離れる。翌年帝国学士院会員となる。

■名古屋帝国大学初代総長として活躍

渋沢は退職後、のんびり海外視察でもしたかったところであろうが当時の日本は臨戦体制であったのでそれは不可能なことであった。1939年、名古屋帝国大学(名帝大)の創設が議会で決議されて、同年2月に文部次官から、総長就任を要請されるが固辞する。その直後に東北帝大総長本多光太郎の来訪を受け、熱心に説得されて引受けた。名帝大設置一ヶ月前のことであった。医学部と理工学部の2学部で出発した名帝大だが、理工学部はまだ名前だけで、東山キャンパスには何もなく、これから施設を整備し、教官を集めなければならないところであった。渋沢が任じられたのは、理工学部の創設に電力技術者としての高い学識や声望を期待されてのことであった。戦時体制下の物質欠乏のきびしい時期の中



総長懇談会にて

出典：『1942年工学部卒業アルバム』

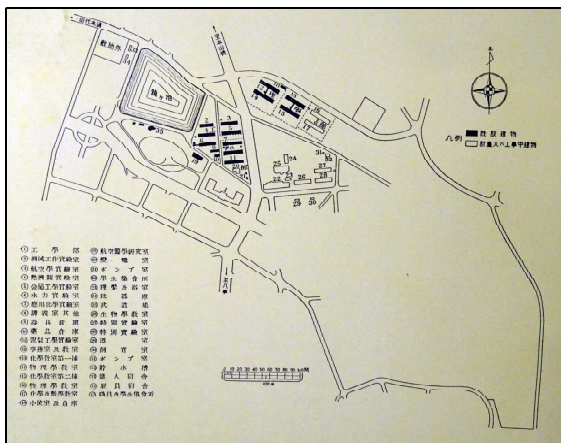
で、大学創設のため、関係方面を駆け回って建設に、また教授陣の整備に努力し、1940年には理工学部を発足させ、1942年には理学部と工学部を分離独立させることに成功している。

敗戦後、渋沢は大学復興の基盤作りに尽力した。GHQによる航空医学研究所廃止にあたっては、文部省にその存続を誓願し、環境医学研究所への改組を申請していたので、付置が実現した。

1946年1月、体調を崩して総長を辞任することになり、「退任に際して学生諸君に告ぐ」を遺した。その中で、大学建設にあたり主張してきた、「進吾往也」、「以和為貴」を餞別の辞として遺している。

1955年に電気分野で初めて文化功労者に選ばれ、これを記念して電気保安に優れた業績を上げた方々に贈られる渋沢賞が電気協会に設けられた。1975年死去。

(藤田秀紀)



名古屋帝国大学の創設時の敷地と建物

出典：『名古屋大学の歩み』